

プロジェクト材木座w i t h相模

もよぶ

材木座が意図せず相模や川崎を陰から支えトラブルを乗り切る話です。
比企谷達はわき役です。

p i x i v にも投稿してます。

目次

第十一話	第十話	第九話	第八話	第七話	第六話	第五話	第四話	第三話	第二話	第一話
------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

第十二話

第一話

夏休みも開けたとある日、今日も材木座は一人である。

そして今日は暑さも和らいでおり屋上にて一人飯である。

購買のパンを頬張っていると三人の女子がおしゃべりしながら屋上に入ってきた。

「我の一人静かな時を邪魔するとは万死に値する」

とボソツと呟くが無論何ができるわけでもなくスマホをいじりつつモソモソとパンを頬張る

「ねえ遥なんかキモいのがいるんですけど」

「ホントだー」

「ねえゆっこ、話しかけてきなよ」

「えー、南いきなよー」

「うわーそれっていじめじゃーん」

入ってきたのは相模南と遥ゆっこの三人だった。

材木座はそれをちらっとみるも

「うわっ！こっち向いた！」

またもこの調子、ここでなんだかんだと反論しても相手の思う壺である、故にこのような場合にとる行動は一つ、スマホを耳に当てると

「なに！それは真であるか？くそっ！それが世界の選択なのか・・・ああ、わかってる。あいつなりの考えだな。ラ・ヨダソウ・スティアーナ」

会話しているように見せかけその場を離れようとするのだがバレバレである。

三人娘は失笑ともとれる笑みを浮かべたも材木座を嘲笑する

材木座は泣きそうになりながらそのまま屋上から立ち去ろうとしたが

「あんた情けないね」

ポニーテールの女子が給水塔の上から声をかける。

「男ならもっとバシッと言えないの？」

とその女子はそのまま給水塔から飛び降りると三人娘へ向き直る

「あんたらよってたかって恥ずかしくないの？あとうるさい」

「あ、川崎さん・・・」

相模が怯む

「あのさあここは本当は立ち入り禁止なの知ってるよね？騒いだり揉め事起こしたら先生たちに気づかれて二度と入れなくなるの分かってるよね？」

「・・・」

「もしあんたらのせいでここに入れなくなったら分かっているよね？」

「だって・・・あいつキモいし・・・」

三人のだれかがボソツと呟くが

「はっ？なにか言った？」

「な、なんでもない！い、いこ！」

川崎に一喝されると三人娘は屋上から出ていった。

「スマヌ、かたじけない・・・」

材木座は一礼する

「あんた図体はでかいのにほんと・・・まあいいや、気を付けな」

そういうと川崎はまたも給水塔の方へ登るのだが、そこへ一瞬強風が吹き川崎のスカー트가めくれる

「・・・見た？」

「い、いや？我はなんも見えてない、黒いレースの下着なぞ我は見てはおらぬ」

その言葉に少しムツとなる川崎

「アンタたちは本当に・・・」

川崎はため息を付くとそのまま給水塔へ昇って行った

「ありがとう！黒レースの人！」

「あんた殴るよ！」

材木座は叫ぶと川崎の怒鳴り声を背に自分も校舎の中へと入って行った。

「しかし以前どこかで会ったような？まあいいか、黒いレースのエロ下着も見れたしな、エロゲならフラグであるな、グフ、グフフ」

と傍から見たら大変気持ちの悪い笑みを浮かべゲスなことと思う材木座だった。

しかしこの時ここで出会った女子と後々厄介ごとに巻き込まれるとは夢にも思っていないかったのである。

第二話

時期は文化祭の準備期間に突入する、無論材木座は実行委員なんて面倒なものに立候補するわけもなく、クラスの催し物も陽キャ達が中心になり喫茶店をやるらしいがそこは材木座、見事にハブられており大してやることもない状態、やはりぶらとする毎日であった。

「まったく、八幡が実行委員になっているとは知らなんだ、奴がやる気を出すとか槍でも降らなければよいが、そして我は暇だ」

教室では陽キャやその取り巻きを囲んで女子たちが喫茶店の打ち合わせという名のおしゃべり大会なので材木座は居場所がない状態であった。

そんな中、文化祭実行委員会がちょっと揉めているという噂を耳にした。

なんでも委員長より副委員長の雪ノ下雪乃の方が働いているとか何とかという話だそうだ。

「ふむ、八幡のみならずあの氷の女王もいたのか、委員長も大変だのう、全くあやつらは揉め事が大好きなようだの、我にはその神経がわからん」

事情なんぞ全く知らないので材木座は気楽なものである。

廊下を歩いているとこの間屋上で会った相模ら三人が話しているのに遭遇した。また何か言われるかと思うやり過ごそうとさっと廊下の角に身を隠す。

「ねえー南、さすがに委員会行かないとやばいんじゃない?」

「えー大丈夫だよ、雪ノ下さんが全部やってるし」

「でも南は委員長じゃん、やっぱり南だけでも委員会に顔出した方がいいと思うけど・・・」

「大丈夫だって!ほら早くいこ!」

あの時自分をコケにした三人娘である

「フム、やはりあれはこの間我をバカにしくさった連中のようなだな、察するにあの南という女子が委員長なのか?氷の女王は恐ろしいからのう、行きたくなくなるのも分るワイ」

三人は若干揉めているようだったが結局相模が折れる感じになったようだ。

相模は足早にその場から去っていった。

「心中お察しますぞ、ま、我をバカにした罰だ、氷の女王にこっそり絞られると

よいわ」

そんなことをブツブツといつつ購買に寄る

「くーちびるゝふゝんふゝん、やはり久米田先生のかくしごとは面白いのう、エンディングテーマに君は天然色をチョイスするあたりがすごく久米田作品っぽい、今期のアニメは絶望的だがこれが生き残ってて助かったわい」

と材木座は売店でパックのコーヒー牛乳と菓子パンを買うと屋上へと向かう、文化祭の準備期間中に早く帰ると両親から

『あんた文化祭近いんじゃないなかったっけ？準備とか手伝いはいいの？』

と余計なことを言われるので屋上でおやつをとりつつ時間を潰してから帰るのがこしばらくの日課となっていたのだ。

ただ今日は天候が悪く外に出るのは難しそうだった為階段の踊り場で時間をつぶすことにしたのだ、腰を下ろそうとしてふと上の方からすすり泣くような声が聞こえる事に気が付いた。

見上げると屋上の扉の前ところに誰かが座っている。

「委員会なんてもう行きたくない・・・もうウチいなくていいじゃん・・・雪ノ下

さんだけでやってればいいんだよ……」

相模が一人座って泣いていた。

これはまずい、気づかれたら何を言われるかわからんぞと材木座はこっそりその場から立ち去ろうとしたがダメだった。

「だれ！」

「ひ！」

相模が顔を上げこちらを睨みつけたので反射的に悲鳴を上げる、やはり面と向かって睨まれると超怖い

「……なにしてんの」

「わ、わわわれは、な、なにも……そそそそそっちこそ」

「ウチは……別にいいじゃん！ 下行くからそこどいて！」

と相模は階段を降りてくるのだが足取りが若干ふらついているようだ、材木座は階段の端っこへと移動しようとする、しかし

「あっ！」

という声とともに目の前で相模が階段から足を踏み外した。

「いかん！」

材木座は菓子パンとコーヒ―牛乳を投げ捨て相模に腕を伸ばすが当然というか相模は逃げるように体を捻る。

己の不細工さを呪い材木座は勢い余って相模の下の方へ滑り込む形になる。

「グボハァ！」

材木座は悲鳴とともにうつ伏せの状態で相模の下敷きに、そして菓子パンとコーヒ―牛乳も材木座の下敷きとなってしまった。

保健室にて

「ごめんなさい」

制服が菓子パンとコーヒ―でぐちゃぐちゃになった材木座へ相模が頭を下げる。
「い、いや我は、だ、大丈夫であるが、その、お主こそ大丈夫であるか？」

さっきとは打って変わって殊勝な態度に材木座はたじたじであった。

相模は足をひねって歩けなくなってしまったので材木座が肩を貸して連れてきたのだ。

始めは嫌がっていたが流石に一人では立てず不味いと思ったのか渋々材木座に連れてきて貰っていた。

保健室には養護教諭はいなかったので勝手に湿布を取り出し相模は足に貼っていた。

「ウチは大丈夫・・・ほんとゴメン・・・」

「左様であるか、なに、礼は不要！これから気を付けるのだぞ！では」

と材木座は立ち上がろうとするが

「ほんとウチってダメなんだ・・・文実の委員長に立候補したら何か変わるかなと思っただけ何やってもダメ・・・」

相模が話しかけてくる

「い、いや、ま、まあ今日は運が悪かったということだ」

と材木座は会話をぶった切って保健室の扉に向かおうとするのだがそれに構わず相模は話し続ける

「ウチも一生懸命やろうとしているのに全部雪ノ下さんがやっちゃって・・・みんなも委員長のウチより雪ノ下さんのいうことばかり聞いてさ・・・ホントウチ何

やってんだろ・・・」

材木座は思った、あ、これめんどくさい奴じゃね？

「もう委員会なんて行きたくない・・・教室にいてもなんか空気微妙だし・・・遥もゆっこも手伝ってくれないし・・・同じクラスの委員の比企谷なんか妙に雪ノ下さんと仲いいし、なんなのあいつ・・・」

誰もいない保健室に男女が二人つきり、しかも相模はそこそのかわいい部類に入る、普通ならドキドキのシチュエーションであるが、三次元の女に絶望し二次元に命をかけている材木座にとってはただのめんどくさい事案でしかない。

「雪ノ下さんにはかなわないし、ウチも仕事出来ないし・・・本当にもう嫌・・・」
事実そろそろ家に帰ってNetflixの新作の攻殻機動隊が見たいなあと思っていたり目の前の女子が新作の草薙素子にちょっと似てるなあと思っている始末である。

時間をかなり潰せたので家に帰っても文句は言われまいと思うがどうかここから脱出できないかと思いい父親の愚痴を思い出す。

「フム、何故お主は雪ノ下殿に勝とうとしているのだ？その辺から間違っておら

ぬか？」

「何がよ！」

「ま、まあマテ・・・良いか？例えば普通会社のトップは社長であるな？」

「今そんな話をしていないでしょ！」

「ま、まあ落ち着いて、聞いてくださらぬか？んでだな、世の中の社長全てが会社で一番仕事が出来て一番頭がいいと思うか？」

「何が言いたいわけ？」

「私の親父殿がよく愚痴っているのだが『会社はナンバー2で持っている』という言葉だ、社長は無能でもナンバー2が的確に社長フォロー、社内管理していれば問題なく回る、これが逆だとワンマン経営になって破綻するということだ」

「無能って酷くない？・・・それにそれだったらナンバー2だけでいいじゃん！」
「まあ物のたとえだ、それとこれも親父殿がよく愚痴っているのだが『社長は社長業をやっている』ということだ」

「・・・意味が分からないんだけど・・・」

「社長は最終的に全て責任を負う故、承認や決済をするのが仕事なんだそうだが、重

要だったり即決が必要な案件は最終判断が出来る社長が出る、下々のことまで口を出す必要はない、むしろそれだと現場が回らなくなるんだと」

「・・・自分で判断なんて出来ないよ・・・」

「だからその為のアドバイスをするのがナンバー2の役目であろう、文化祭とて同じ事、常に副委員長の雪ノ下殿を同席させて意見を求めるのだ、雪ノ下殿で知恵が足りなかったら八幡を使え、奴は余計な知恵だけは回るからな、四の五の言ったら盟友である我が許可したと伝えれば泣いて喜ぶであらう！」

「・・・でもウチ、バカにした態度取っちゃってるし、そのせいか雪ノ下さんは言い方きついし、比企谷も何考えてるかわからないし・・・たぶん謝っても酷いこと言われそう・・・」

「安心めされい！我なんぞ自作の小説を常に持ち込んでいつも言葉の暴力で叩かれておる！でも文句は言っても奴らはきちんと読んで文句を言ってくるぞ！それが奴らの素である！だから全く気にする必要がない！」

「・・・そっかな」

「わだかまりがあるなら一言ごめんなさいとでも言っておけばよからう、奴らはそ

れでチャラにしてくれる、何、我なんぞ何時もやらかしてゐる故、土下座を超えて奴らの目の前で奉仕部の部屋をなんと転がりまくったかわからん」

相模はうつむいて黙り込んでしまった。

ここでダメ押しである

「こんな名言がある、『本当にいいリーダーってのは後ろでどっし構えているもの、もしミスがあつても決して慌てず動ずることなく』」

「なにそれ？」

「その人はこうも言っていた『リーダーというものは距離置いて物事見ることが大事』ともな、雪ノ下殿とあんま仲が良くない貴女ならびったりであろう」

「・・・君って失礼だよ、それにそれ誰の名言なの？」

「ARMSという漫画に出てくる通りすがりのサラリーマンのセリフよ！最後にこうも書いておった『リーダーというものはね・・・他人をおだててこき使えばいいのさ！自分は安全な場所で！失敗してもあははと笑い！もし勝ったら目一杯いばりちらしてやるのさ！！みんなの前で！！そんなものさ、他人から見たらね。』私の親父殿はこれ聞いたとき感銘を受けておった、」

「漫画って・・・君面白いね・・・そっか・・・委員会行ってみようかな・・・と
ころで君の名前なんだっけ？」

材木座はコートをバサツと翻すと

「聞いて驚け！刮目せよ！我は2年C組出席番号12番！剣豪將軍材木座義輝！
この名をしっかりと心に刻むがよい！」

と材木座は口上を述べると自分で考えたかったいいポーズを決める

「ウチは2年F組の相模南、ってか材木座君、制服汚れてるのにそんなポーズ決
めてもしまらないよ？ごめんね、今拭くから・・・」

「これはしたり！心配ご無用！母上殿に洗濯させるのでな！では我はこれから戦
場に赴かなくてはならない忙しい身の上！止めてくれるな！サラダバー！」

と材木座は颯爽と保健室を立ち去るのだった。

第三話

相模覚醒の回です。

ちよっと気になったのは原作に書いていた2・Cの本来の出し物の材木座脚本の演劇、一体どんな惨状になったやら・・・

材木座は啖呵を切って保健室を出たのいいが、

「むう、忘れ物をしてしまった・・・これも奴らの罠か・・・」

と無駄な独り言を言うと一旦教室に戻ってから帰ることになってしまふ、途中ちよっと気になったので会議室の近くまで行ってみることにした。

会議室の前には相模と雪ノ下、比企谷がいた。

「サボっててごめんなさい！ウチ足りない事ばかりだから何をしたらいいかわからないの、改めてウチのサポートお願いします！」

どうやら相模は早速謝罪しているようだった。

「それは大丈夫よ、それに私もサポートという立場を超えていたという自覚はあったわ、こちらこそごめんなさい」

「謝るのは勝手だがなんで俺まで？」

「とある人から言われたんだけど雪ノ下さん以外に比企谷にも手伝わせるといって、比企谷って頭いいんだって？その人すごくほめてたよ、ウチに協力してくれないかな？君の力が必要な、お願いします」

深々と頭を下げる相模

「・・・いやいいけどよ、それ言った奴だれよ？」

比企谷は照れているのか頭をぼりぼりをかいている

「相模殿は早速『おだてる』コマンドを使っておるようだな？あやつは女子には弱いからのう」

ニヤニヤしながら様子を伺う材木座

「盟友だって、泣いて喜ぶって言ってた」

と相模が言っていると比企谷は呆れたように叫ぶ

「あの野郎！・・・」

それをすかさずニコニコとしながら雪ノ下が突っ込みを入れてくる

「あら比企谷くん？人望があつてうらやましいわ」

「うるせえ、なんにも嬉しくねえよ」

いつもの言い合いが始まろうとしたところで相模が強引に割って入る

「ごめんなさい、そういうのは後にしてもらえませんか？早速今の細かいスケジュールとか決済の書類の整理がしたいから手伝いお願いします」

そう言うとき比企谷も雪ノ下も顔を真っ赤にして相模の後ろを追うように黙って会議室へ入っていた。

「フム、本当にやるとは恐れ入った、しかし八幡は社畜の道を進んでいるようだよ、働いたら負け！これすなわち正義よ！おおっと我にもアニメを見るという仕事があったな！急がねば！」

それから耳にする文化祭実行委員会はちょっと変わったものになった。

なんでも委員長は常に雪ノ下を従わせ、それはまるで社長と秘書のようだ、さらに背後にはやばい目つきのヒットマンを抱えており、従わないものや反抗する者には影で制裁を加えられるという話や、有志団体のOGが来て遅刻した人を肯定す

る発言をした時にはOGに迷惑だから出ていけと言っていたとか、その様相はまるで恐怖政治だとかいう話だ。

ただこれは一部のサボりたい連中が流している噂らしく真面目に委員会に取り組んでいる者にとってはいつまで何をどのくらいと具体的に明瞭な指示を出してくれるので評判はすこぶるよかった。

「人間変わるものだのう、まるでカリスマだな、カリスマ委員長？・・・うーん委員長と言うとメガネにおさげであらう、あんな耳にピアスのリア充では断じてない」

そこからは文化祭が始まるまで材木座は相模の姿を見ることはなかった。

次に彼女の姿を見たのは文化祭当日

生徒会長の挨拶が終わり委員長の挨拶の時だった。

相模がマイクを持つとキーンとしたハウリング、それとともにどっと笑いが起きる、しかし相模はそれをものともせず

「えー失礼しました、音響にはあとでしっかり言っておきます、本日は

・・・」

何もなかったように挨拶が開始された。

「はあー我だったら緊張でぶっ倒れてるな、委員長ともなれば肝も凶太くないと行かんのか」

オーブニングセレモニーが終わると文化祭初日がスタートされる。

「ふん！リア充共が」

一緒に回ろうと比企谷を誘ったのだが

「貴様のせいで余計な仕事が増えた、絶対許さん」

と追いつかれたので一人で回る羽目になった、はずなのだが現在自分のクラスの催し物の呼び込みである。

妙な帽子と手作りの変な看板をぶら下げいわゆるサンドイッチマンの形で客の呼び込みと宣伝である。

「材木座くん？って暇っしょ、呼び込みやつといて、あと注文とかも手伝ってあげて、俺ら忙しくて無理なんだわ、青春の思い出作りにいいっしょ？」

とクラスの陽キャに仕事を押し付けられている状態なのだ。

「クソ！打ち合わせの時は我をハブってた癖に！しかも名前を疑問形で呼ぶとは

どういふことだ？」

と半ばやる気もなく教室前をうろうろしている状態

「おなか痛くなったといって帰ろうかな」

と思っていたが中心になっていた陽キャ連中がクラスの大半の女子や取り巻きを連れていなくなっているため回すのも大変な状態なのだ、一人抜けただけで結構な痛手だ。

「我も社畜の才能がありそうだな」

と外で呼び込み、客が入ったら注文取りとまあまあ忙しい。

窓の外ではキャーといった歓声が聞こえる、文科系の部活が外で催し物をしてい
るらしい

「いいなあ・・・我も見に行きたいなあ・・・」

「ごめんね材木座君、みんな遊びに行っちゃって・・・」

残されたのはクラスではあまり発言権のない底辺カーストの多少は真面目にやろう
うとっている人しかない、実質的な準備の大半もこの人たちがやった模様

「まー我はこういう時ぐらいしか役に立たぬのでなあ」

気を取り直して呼び込みをしようと廊下に出ると

「ふーん、ここ材木座君のクラスだっけ？ ってかその恰好はなによ」

腕に『委員長』の腕章をつけた相模が立っていた。

「こ、これはこれは委員長殿、我らがクラスの喫茶店『自分探し』へようこそ」

「自分探しって・・・あんたのその恰好こそ自分見失ってんじゃないの？」

クリスマスで使われるようなとんがり帽子の先には風船、看板には『自分探し』の店名とその場の勢いで書いたポエムが書かれている。

正直この格好は罰ゲームといってもいい。

「致し方なからう、青春といえど自分を探すだの、恋だの愛だの自由だの盗んだバイクで走り出して校舎のガラス窓割りまくって支配からの卒業だのが好きだからな！」

「そんな強く力説しなくても・・・なんかあんたも比企谷みたいにひねくれてるね」

「ふむ、それは誉め言葉と受け取っておく、それで入るのか入らないのか？」

「入るよ」

「はいおひとり様・・・ってあれおぬし前見た時二人ほど仲良さげな連れがいた

であろう」

「これも見回りの仕事だから別行動なんだ、委員長ってほんとめんどくさい」

と嫌そうな表情になる相模、これ以上突っ込むと愚痴が始まりそうだったので案内しそのまま注文を取る

「あれ？材木座君が注文を取るの？」

「ウム、喫茶自分探しの店員は現在ほとんどが行方不明でな、自分を探す前に店員を探さないといけない具合よ、なんなら我が客を呼び込み、我が注文を取って我が食い物を提供することもあるな、まさにワンオペ」

「ちょっとそれってどういうことよ・・・」

「我らに押し付けて行った奴らが言うにはこれが『青春の思い出作り』なんだと、そのような理由で面倒なものは御免であるな、今ならミネラルウォーターがお勧めであるぞ」

「思い出作りって・・・代表者は？」

「おらぬ」

「連絡先は？」

「しらぬ」

そこまで聞くと相模はおもむろに携帯を取り出すと

「もしもし？ あんたの出番・・・はぁ？ いいから名簿から2・Cの代表者探して捕まえてクラスに連れてきて・・・今忙しい？・・・ん？そこに結衣がいるの？ちよっと変わって・・・ゴメン結衣ちよっと協力して・・・」

なにやら電話をしている。

「しばらくウチ手伝うから、材木座君は外で呼び込みと案内だけやっというて」

と相模は喫茶店の手伝いを勝手に始めた。

材木座が外に立っているとしばらくして比企谷と雪ノ下が2・Cの陽キャたちを連れてきた。

「まったく由比ヶ浜の奴電話するだけ誰がどこにいるか分かんとか異常だろ」

「あなたと違って顔が広いものね、ごめんなさいあなたの顔の皮膚は他の人より厚かったわね」

「誰の面の皮が厚いって？どの口が言っているのやら」

いつもの口論を交わし2・Cの目の前まで来る。

「はっ！おい雪ノ下、この喫茶店『自分探し』だって」

「あら？本当ね、この人たちにとって自分を探してもらえたから本望じゃないかしら？」

二人はそう言うときろろと陽キャ達を教室に押し込んで行き最後に雪ノ下と比企谷が入る。

教室の中からは

「すみませーん一時閉店にしますのでお客さんは退店願いまーす、お代は結構です」

と聞こえてお客と仕事をしていたクラスメイトがぞろぞろ出てくる。

最後に相模が顔を出す

「材木座君、すぐ終わるからちょっとまっててね」

そして教室の扉が閉まった。

しばらくクラスメイトと扉を見つめていると扉が開き相模が顔を出す

「終わったよ、彼達は反省して文化祭中は言い出しっぺの自分たちだけで回すって言ってくれた」

後ろから雪ノ下と比企谷が出てくる。

「売り上げはきちんと全額学校側に寄付してくれるそうね」

「すげえよなあ今のご時世こんなにボランティア精神にあふれる連中がいるなんてなあ」

「途中で閉店もしないんだよね？『青春の思い出作り』楽しんでね？委員会できっちり監視するから」

二人の背後を見ると陽キャ達の顔が青ざめているのが見える

「さて比企谷くん、由比ヶ浜さんはどこかしら？」

「あーこっちだ」

「なんでも『はにとー』というものを一緒に食べたそうね？何故私を誘わなかったのかしら？」

「俺に言うなよ・・・」

そう言いながら二人は後ろを振り返ることなく校舎の奥へと消えていった。

「あの二人は相変わらずのようだが中で一体なにが？」

「まー材木座君は知らない方がいいと思うよ？それにしても比企谷はほんとだよ

ね、結衣のことどうすんだろ？」

「何気に怖いなおぬし、あと結衣って由比ヶ浜殿のことか？なんかあったのか？」

「ん？気にしないでいいよ、んじゃ材木座君いこうか？他のみんなも遊びに行っているよ、お店は彼らが責任をもってやってくれるから、そうだよね？」

「は、はい！」

いつもイキリ倒している陽キャたちは借りてきた猫状態だ。

「んじゃいこっか」

材木座は妙な帽子と思い付きポエムが書かれた看板を陽キャに渡すと相模と一緒に見回りという名目で文化祭を回ることになったのである。

第四話

目の前の出来事が急展開すぎてただ流されるがままにしていた材木座は家に帰って布団に入った後ハッと気づく。

「アレ？なんか今日の我リア充だったんじゃない？」

文化祭で自分のクラスの店番、その後に女子と一緒に文化祭を回るとか何処の世界のリア充なんだろうか、しかも普通の女子ではなく委員長である。

本来なら一人で適当に回った後さっさと帰って家でアニメを見るかゲームをしていたはずだ。

「おかしい」

そう言ってスマホを取り出す、スマホには相模南のLINEが登録されている。一緒に回った時にせっかくだからと強引に登録されたのだ。

「なんでだ？」

『仕事も兼ねてたからゆっくり回れなくてマジゴメン！明日も忙しくて一緒に回るのは多分無理、だからあの時のお礼はまた今度ね』

「本当になんだこれ？それにあの時ってなんだっけ？」

相模としては階段から落ちた時庇ってくれた時の話をしているつもりなのだろうが当の材木座はそんなことをすっかり忘れていた。

「我が三次元の女子とLINE？明日には隕石でも振ってくるのではないか？」頭に疑問符を浮かべつつ材木座は次の日を迎えることにした。

文化祭二日目、今日は一般参加の日でもある。

そのせいもあって委員会の人たちは昨日以上に走り回っていた。

材木座は一人でふらふらと校内を歩く、2・Fの演劇は先日相模と見に行っており、一度見ればおなかいっぱいなので本日はスルーである。

歩いていると目の前に比企谷が見えた、カメラをぶら下げてるので文化祭の様子を撮影しているようだ。

「ふうむ、八幡め寂しそうではないか、我も被写体探しを手伝ってやらぬとなあ」と近づくが隣に雪ノ下がいるのに気が付く

「クソ！リア充め！」

悪態をつくとその場を離れ、体育館でライブを見学したり各クラスの出し物をひ

やかしに行ったり、昨日見れなかった文科系の部活の見世物を見に行ったりとそこそこ充実した一日を過ごすことが出来た。

あちこち回って疲れてしまい、休憩をしたかったのだが図書室は閉鎖されてるし体育館はうるさいし、自分の教室は先日のこともあるので休憩の為には入りにくい。

その為屋上へ来ていた。

せっかくだからと給水塔の所まで上り下を見下ろす

「フム、ここから見ると人がごみの様だ」

構内には沢山の人が見え、あちらこちらで何かのイベントをやっているようだった。

「すこし昼寝をするか」

材木座はそのまま横になり昼寝をすることにした。

「……めてください！」

「……っつせーぞ！」

なにやら揉めている声で目が覚める、と同時にスマホに着信が来た。

横になりながら出ると相手は比企谷

『材木座、おまえ一人になりたい時どこにいる？』

「なんだ藪からスティックに・・・」

と会話を続けるが下の方ではまだ誰かが騒いでいるようだ。

「てめえのせいで俺のダチが迷惑してるって言うじゃねーかよ！」

「クラスの出し物を投げっぱなしにするのがいけないでしょ！」

「うっせーぞ！」

揉めている声が聞こえる、うるさいなと思いつつ比企谷との会話を続ける

『人を探しているが見つからん、あとは人目につかんような所ぐらいしかない』

「誰を探してるのだ？」

『文化祭実行委員長を探している、何処にもいないんだ！』

「なんと！」

材木座は上半身をおこして何気なく騒いでいる男女を見ると

「本当にやめてください！先生を呼びますよ！」

相模が他校の不良数名から絡まれている所が見えた。

「呼べばいいだろ！」

「キャ！」

不良の一人が怒鳴り散らし相模にビンタをしたようだ、バシツという音とともに相模が屋上に転がる

「……屋上だ八幡……委員長殿はそこにおる……至急援軍を頼む」

『屋上？　どういうことだ？　おまえ今どこにいるんだ！　援軍って！　おい！』

「ちと怖いがこれを見過ごすのは出来ぬよなあ」

材木座はスマホを懷に入れそのまま立ち上がった。

材木座は不良たちへ向き直ると大声で叫ぶ

「て、て天が呼ぶ、ち地が呼ぶ、ひひひ人が呼ぶ！　悪を倒せと、俺を呼ぶ！　聞け！　あああ悪人ども！！　わ、我は正義の戦士！　仮面ライダー……じゃなくて剣豪将軍材木座義輝！！」

大見得を切ったが足は恐怖でがくがくに震えている。

大声で某ライダーの決め台詞を叫ぶ材木座に不良達は気が付き振り向く

「はぁ!?　んだてめえ！」

「きききき貴様ら！　いい、委員長殿に狼藉を働くのを今すぐ止めるのだ！」

「うるせえ！全部こいつが悪いんだよ！」

とヤンキーは倒れている相模の髪の毛を掴んで引き起こす

「いったーい！！！！ やめてよ！」

「や、止めぬか貴様ら！わ我が相手になる！委員長殿を離すのだ！」

「材木座君、だめだよ！」

「委員長殿！『に、人間は、負けるとわかっていても、戦わねばならない時がある。だから、たとえ負けても勝っても、男子は男子なり。勝負をもって人物を評することなかれ。』お、お札にもなっている有名な人が残した我の好きな言葉でな、ももももつとも、そ、その暴力でしかじじ自分を表現できぬ、サ、サル共は知らぬだろうが！」

「んだてめえ！降りてこい！」

「ぜ、ぜ是非もない！しばし待たれよ！」

材木座はそう言うと言と給水塔からはしごをゆっくり降りてくる、傍から見ると落ちて着いているように見えるが実際は緊張で足に力が入らず手も汗でぬるぬるである。

「八幡、早く来てくれ・・・」

比企谷がくるまで時間稼ぎをしているつもりだったが、材木座の願いもむなしく煽られた不良達は当然激高し、降りてくる材木座の足を引っ張るとそのまま屋上の床に叩きつけた。

「ゲフウ」

床にたたきつけられるとそのまま不良に囲まれる

「誰がサルだって？ああ？このブタが！」

不良たちは材木座に蹴りを入れ始める

「ひいひい！」

材木座は悲鳴を上げて頭を抱えて丸くなる

「悪を倒すんだろ？おい！なんか言ってみろ！」

不良たちが材木座にさらなる攻撃を加える

「ちよつとやめなさいよ！」

相模が悲鳴を上げる

「委員長殿こそ早く逃げ・・・ぐはあ！」

材木座の腹に鋭い蹴りが入る

「逃げんじゃねーぞ！」

「せっかく遊びに来たのに俺のダチはクラスから抜けられなくなってるし！売り上げも山分けのはずが委員会に売り上げを管理されて全額学校に寄付することになってるとか言ってるしよ！この女に後で責任とってもらうからな！」

と不良が怒鳴り丸まっている材木座を囲んで蹴りを入れる。

痛みに耐えつつしばらくすると

「お前たち何やってんの？」

聞き覚えのある声がする、材木座が顔を上げると比企谷が屋上の扉を少し開いて顔だけ出していた。

「なんだおまえ？ここは立ち入り禁止だからとっとと帰れ？なあ？」

不良の一人が比企谷へと近づくとさらに声がする

「確かにここは立ち入り禁止だ！貴様ら何をやっている！」

バーンと扉が開かれるとそこには体育教師の厚木先生がいた。

「お前ら他校の生徒か！どこの学校だ！」

「い、いや俺達は・・・」

「貴様ら！今更ごまかしても無駄だからな！ただでは済まさん！こっちにこい！それとお前ら大丈夫か？話は後で聞く、鍵が壊れていたのは俺も知らなかったしな」

厚木は材木座と相模を一瞥すると不良たちをどこかへ連れていった。

「助かった・・・スマヌな八幡」

「俺の方こそ遅くなつてすまん」

「材木座君大丈夫？って比企谷なんでそんなに手回しよかったの？」

相模が材木座のところへ駆け寄る。

「こいつがスマホを通話のままスピーカーにしてたからな、俺は運よくうろついていた厚木にそのまま聞かせて屋上に連れてきたわけだ、しかし材木座よく耐えたな」

「貴様らに小説を見せる度に『耐える』のコマンドは鍛えられておるからな」

「なんだ、んじゃそんだけ耐えられるんだったら小説はネットに晒せ、もう俺達の感想は必要ないな」

「我をハブらないでよ！はちえもーん」

「ふふふ、君たちって本当に面白いね」

「面白いのはこいつの顔だけで……って相模！早く戻らないとエンディングセ
レモニーがはじまっちゃう、今雪ノ下と由比ヶ浜達が即興ライブで時間を稼いでる
んだ」

「え！本当！材木座君ゴメン、ウチ急いで戻らないといけないから！」

「我は大丈夫だ！この場は任せて行くのだ！」

不良たちに蹴られたところが痛むのでそのまま横になりながらサムズアップをす
る材木座

「そのセリフ言いたかったただけだろうが」

比企谷は突っ込みを入れつつ扉の奥に相模と消えていった。

「フヒーなんだかともんでもないことになったのう……」

仰向けになる材木座、しばらくぼーっと空を眺める、時刻はそろそろ夕方にさし
かかろうとしていた。

ピロリンとLINEの着信音が聞こえる

相模から感謝のスタンプが届いていた。

「間に合ったようだの」

しばらくすると体育館から歓声が聞こえてくる、その歓声を聞きつつ材木座は思う

「やっぱりなんか青春してないか？ おかしいなあ・・・現実にはクソゲーのはずなのに・・・」

厚木が呼びに来るまで材木座はそのまま空を見上げているのだった。

第五話

文化祭終了後、材木座のクラスは大騒ぎになっていた。

クラスの陽キャたちは全員停学、他校の不良達も処罰を受けたらしい。

被害者の相模は暴力に負けずエンディングセレモニーをきちんとこなしたということで株が上がっていた。

しかし材木座のことは材木座自身が面倒になるのを恐れて関係者に口止めを行ったので広まることはなかったのである。

実際今回の事件の功労者ということで皆に紹介するから文化祭の打ち上げに参加してと相模からお願ひされたが。

「我のような者が行っても疎外感を得るだけよ、いつかの時のように『あの人だれー?』『キモイ』とか言われてな」

そう言つて材木座は断り相模は以前屋上で初めて材木座に言った言葉を思い出して

「う・・・ゴメン・・・」

と言って黙り込むしかなかったのだ。

でも打ち上げにいかなくていいからせめてLINEで拡散すべきと提案をするのだが。

「大体、大げさな口上を述べたくせに結局ボコボコにされただけではないか、格好が悪い、恥ずかしい」

ということでその提案も却下

そこまで言われたので相模は諦めたようだが、それとは別に相模から毎晩頻繁にLINEが来るようになっていた。

ただその内容は友人間の愚痴やバイト先での愚痴ばかりである。

「委員長殿もリア充と思いきや苦勞されている様だのう」

問題は女子の友達間でも話せないとかで見ているこっちも気が滅入りそんな話題ばかりなところ

「リア充もリア充なりに大変の様だ、やはりボッチが一番であるな！」

といいつつも漫画やラノベ片手にあちこちから名言を引用しては律義に返信する材木座であった。

文化祭が終わり結局屋上は閉鎖になってしまった

「一人飯をするところが減ってしまったな」

あとは新館の辺りになるのだが・・・とパンとコーヒー牛乳を片手に目的地へとたどり着く

この辺は静かで誰も来ないのだ、ベンチはないが雑草が芝生のようになっており座るのにちょうどいい

「よし、誰もおらぬな」

材木座は木陰に腰を下ろすと

「ちょっといい？」

ふいに後ろから声をかけられびくつとなる、振り返るとどこかで見たポニーテールの女子

「え？えええ！いい、いったいどこから・・・はっ！まさか組織の！貴様何奴！」

狼狽する材木座

「何言ってるの？普通にその木の影だよ、あんたとは前屋上で会ったよね？忘れた？」

「屋上・・・ああ！あの黒レースの！」

「あんた本当にぶつよ？」

と川崎は怖い顔で材木座を睨む

「ヒッヒー！この度はご無礼申し訳ありませんでした！」

ビビった材木座はその場で土下座

「ちよつとあんた！殴るってのは冗談だから顔上げてよ・・・」

いきなり土下座されて狼狽する川崎

「冗談でしたか・・・」

と材木座はほっとして顔を上げる

「して何故こちらにいるのだ？」

「どっかのバカのせいで屋上には入れなくなったんでね」

今回は睨んではいなかったのだが川崎の目つきが元々きつい為かまたも睨まれた
と思ひ更に土下座する材木座

「この度は誠に申し訳ございませんでした！」

「ちよつと！あんたなんかやったの？他校のバカのせいだって聞いているんだけど

？もうやめて、顔を上げてよ……」

と川崎は材木座の前にしゃがむがそれがいけなかった。

「い、いやその件についてはだな……あ」

と顔を上げた先にはしゃがんだおかげでスカートがめくりあがり丸出しになった黒レースの下着

「成程、貴女はよほど黒のレースがお気に入りに見える」

下着を凝視しながらつい口に出す材木座だったが、川崎の顔が見る間に真っ赤に染まる、それに気が付いた材木座は狼狽し言い訳をするのだが

「は！ いやちょっとタイム！ 今のなし、我何にも見ておらぬ！」

「死ね！」

怒りと恥ずかしさで感情的になった川崎は顔面に正拳付きを食らわせた。

余計な事言わなきゃよかった

薄れゆく意識の中、材木座はぼーっとそれだけを考えていた。

材木座は頭がとても柔らかいものに包まれてる感触で意識を取り戻す、懐かしいような感じがして気持ちがいい、しかもいいにおいがする

「これはもしや幼少の時の記憶か・・・あの頃は幸せであった・・・」

とても気持ちがいいのでその感触をもっと得ようと体を反転させ柔らかいものに顔をうずめるのだが

「ちょっと！この変態！あんた！起きてるんならどいて！」

聞き覚えのある声とともに材木座の顔は地面に放り出される

「ぶべら！」

「ホントにもう信じらんない！」

「む？私の記憶は？そしてここはどこ？」

目が覚めて狼狽する材木座、顔をあげると川崎がスカートの裾を抑えながら正座し顔を赤らめている。

「本当にあんたは・・・あんたが気絶してから10分もたってないよ」
その声で完全に目が覚めた

「一体先ほどの感触は・・・」

「いいから忘れて！」

「は、はあ」

材木座は何が起きているのかよくわからなかったが一人静かに食事をとる雰囲気ではないということは理解できた。

「で、では我はこれで・・・」

と材木座はその場から立ち去ろうとしたが

「ちょっと待って！」

「ひい！お、お金はありませぬ！」

「違うから、アンタに相談があるんだけど」

「相談？ハテ？」

川崎は自分の隣に座るように言う

「ム、隣に？」

流石に女子の隣に座るのには抵抗がある

「何意識してんの？」

しかしまたも睨まれたため材木座はしぶしぶと隣に座りパンをかじり始める

「して、相談とは？」

と材木座が聞くと

「あんた比企谷と仲良かったよね？」

「うむ、奴とは盟友の間柄であるが・・・奴がどうした？」

「じ、じつは・・・」

と川崎は先ほどまでの威勢はどこへやら突然もじもじとし始める

「文化祭の最終日にあいつなんか急いでみたいで、屋上の開け方を教えたらあいつがあたしに愛してるって・・・」

「んなもん冗談に決まっておる、我もたまに言われておるしな」

二次元ならバッチリフラグが立つのだがここは現実世界、現実はどうやろうとフラグなんか立たないクソゲーだと材木座は知っていた。

「多分そうだと思う、でもあいつは以前あたしにスカラシップのこと教えて助けてくれたし・・・」

スカラシップ？もしかや以前の奉仕部の依頼の奴か？

なんかラーメン食って帰ったら、次の日スカラシップのこと教えて解決したと言われたことを思い出した。

ついでに名前も思い出した、確か川崎とか言ってたような気がする。

「あの日からあいつの事本当に意識しちゃって……もしかしてって思っちゃってさ」

「それで我にどうせいと」

「わかんない」

「は？」

「どうしよう、全然わかんない……」

川崎は両手で顔を抑えて頭を振っている

「……では我が折を見て八幡におぬしの事どう思っているか聞いておいてやろうか？」

「え？ちょっと！それは……恥ずかしい……」

「我もお主のこと依頼で知ってるわけだし何気なく聞くだけだから何も問題なからう？」

「そりゃそうかも知れど……」

材木座は残ったコーヒー牛乳を一気に飲むと

「この剣豪將軍に全て任せよ！」

とコートをバサツと翻しその場を立ち去ることにした。

第六話

「ぶっちゃけめんどくさい」

何故かここ数日、最近比企谷に近づくタイミングがつかめず、なかなか話しかけられない、今更ながら大見得を切ったのを後悔している材木座である。

体育の時間は陽キャ連中が停学となっており変に人が固まる事も無くなったため、組む人が増え、わざわざ比企谷と組む必要もない状態、奉仕部に行こうにも最近プロットすら思いつかない状態なので行く理由もないのである。

用もなく部室に行つて話をしようにも不審がられるか追い返されるは確実、そもそも材木座としては用もないのに雑談するために会いに行くと言うことが出来ないのだんだんめんどくさくなってきていたのだ。

「分りませんでしたーといってまた土下座すれば許してくれるかのう・・・」
面倒になって色々酷いことを考え始める材木座だった。

放課後、図書室にでも行こうかと校内をふらついていると相模とその友達が向こう側から歩いているのに出会った。

相模とは毎日LINEを交わしていたが、学校で実際に接触するのはどうかと思っていた為、すれ違いざまに材木座は軽く会釈をしてそのま通り過ぎようとした。

「あ！ウチちょっと職員室に用事あるの忘れてた！」

「えー南、マジで？」

「ゴメン！文実の後始末がまだあって！先帰ってて！」

すれ違いざま相模が友達にそう話しているのが聞こえる。

「もう文化祭も終わって数日経つのに委員長殿は大変よのう」

と材木座は完全に他人事である、そのまま図書室へと向かう、しばらく歩いてる

「ちょっと！」

後ろから声がする、まあ自分でないだろうと無視して歩いてると

「ちょっと無視しないでよ！」

という声とともに相模が目の前に回り込んできた

「これはこれは委員長殿？職員室に用事があったのでは？」

「それはいいの、それより材木座君に話があるんだけど」

「はあ」

一体何用だといぶかしげな視線を送っている

「あんたって川崎さんと付き合ってるの？」

「は？ 我の様なキモデブが現実の女子と付き合えるわけないであろう？ 三次元なんぞ我にとってはもはやファンタジー、二次元こそが我にとってのリアルであるな」
「意味が分かんないんだけど・・・そんなことより新館のあたりの木陰で川崎さんといちゃついていたの見たって人がいるんだけど？ どういうこと？」

「見間違いでは？」

「だって、川崎さんと並んでご飯食べてたとか・・・」

「ま、まあ確かに一緒に食べたが、そのぐらいはその辺のリア充なら日常茶飯事であらう」

「それだけじゃなくって、その・・・川崎さんに膝枕してもらったとか・・・」

「へ？」

「んでそのまま・・・その・・・ふとももに顔を擦りつけていたとか・・・」

「はあ？」

顔を赤らめて俯く相模に哑然とする材木座

「そんなことする訳が・・・もしや！」

氣絶した時、頭を感じた柔らかい感触とその柔らかいものに顔をうずめた事を思い出す。

もしや氣絶した自分を介抱するために膝枕をしてくれていたのだろうか？

んで自分はそれに気が付かないで？

「・・・委員長殿、誤解だ」

「もう委員長じゃないんだけど？ んで本当なの？」

「本当だけど本当ではない」

「は？ どっち？」

「委員長・・・いや相模殿！ なにか怖い！ そしてなんか近い！」

相模が目釣り上げて材木座に迫る、相模からはなんだかいにおいがするなあと余計な事を考える材木座

「んでどっちなの？」

「良くわからぬのだ」

実際その時は意識が朦朧としていたので良くわからなかったので嘘はついていない

「は？」

「良いか？事は大変複雑なのだよ、順を追って話す必要がある」

「ふーん、んじや言い訳聞こうか？」

なんでこんなことになったのかと材木座はめんどくさいと思いつつ歩きながら説明をする

「・・・というわけで別に逢引していたわけでは無い、川崎殿も困っていた御様子なのだ」

「ふーん、なんだ別にいちやついてた訳じゃないんだ」

座るところが見つからなかったので自販機でジュースを買った後、中庭にベンチに腰をかけている。

「我がかのような女子といちゃつける訳なからう・・・」

「でも川崎さんの下着は見たんでしょ？二人っきりの時に！」

「何故怒る？大体三次元の下着なぞ見てもな・・・」

「君結構失礼だよ？」

二次元だったらドット単位で確認するのだがと付け加えようとしたがドン引きされるのは確実だったのでそこは言わなかった、しかし相模がなぜか怒っているのになだめにかかる。

「そんなこと言われても・・・それに見られるのは普通に嫌であろう？例えば相模殿だって我が見せろと言ったら即通報であろう？我はまだ捕まりたくない」

と材木座が言う

「・・・もし・・・どうしてもって・・・」

相模が突然赤くなりもしもじし始める

「今までのお礼もあるし・・・どうしてもって・・・」

と相模はスカートの端を両手でキュッと握る

「え？」

態度が思っていたのと違うので狼狽する材木座

「そ、それより川崎殿の事だ、どうすればよいかのう？」

相模の様子がおかしいので強引に話題を変えることにした。

質問されていることに気が付きハッと我に返る相模

「え？ああそうだね、材木座君は比企谷の盟友なんでしょ？普通に聞けばいいじゃん」

相模がいつもの様子に戻ったようなのでほっとする材木座

「それが最近そういうことを話す機会が無くてのう・・・メールやらLINEやはやつの気まぐれで一方的に打ち切られるし、これを聞くために奉仕部に行くのも変だしな、雪ノ下殿と由比ヶ浜殿もいるし・・・」

「クラスも違うしね」

うんうんとうなずく相模

「まあ急ぐ物でもなし、そのうちチャンスはあるだろう」

「うーん話す機会か・・・」

相模はあごに手を当て考え始めた。

「相模殿？」

「・・・うん！今度は材木座君をウチが助ける番だね！ウチが話す機会作ってあげる！」

「は？」

「まー任せて！」

材木座が差し迫った体育祭の実行委員長に相模が立候補したと知ったのはその二日後であった。

第七話

材木座がイケメンです

「ゴメン！」

例によって新館近くの木陰にて材木座が昼食を取ろうとしたところ相模がやってきて頭を下げてきた。

「いかがでした？ 藪からスティックに」

突然の謝罪に戸惑う材木座

「実は文化祭の実績があるから体育祭も委員長にならないかってオファーがあつて・・・」

理由を説明する相模、生徒会長から奉仕部に依頼があり、奉仕部から相模に実行委員長にならないかとオファーがあつたとのこと。

正直悩んでいたが先日承諾したとのことだったが

「ほう、委員長に返り咲いたか、流石相模殿、してなぜ謝るのだ？」

「この間言ったじゃん、比企谷と話す機会作ってあげるって、文化祭みたく比企谷や雪ノ下さんにサポートをお願いして、材木座君にも有志って形で参加してもらえれば比企谷と一緒にいられるでしょ？でも……」

と奉仕部へサポートをお願いしたところ

『文化祭実行委員会は相模さんの活躍でかなりスムーズに進んだし、今回は一人でやってみてはどうかしら？大丈夫よ、困ったら相談にきなさい』

と言われ、同席していた生徒会長からも相模さんだったら大丈夫と言われてしまったとのことだった。

「あそこまで信頼されてたら頑張るとしか言えないじゃん、計画が狂っちゃった……」

「良いではないか、我のことは気に病むでない、頑張られよ」

「ありがとう……って材木座君って前から思ってたけどなんか妙に尊大じゃない？」

「癖だ、ほっとくがよい」

「フッフ、んじゃあね」

体育祭実行委員長となった相模、ただ早速目玉競技の選定で詰まっちゃった。

その為奉仕部へ相談したところ比企谷の提案で海老名をアドバイザーに呼ぶことになった。

「なんで海老名さん？」

「文化祭の演劇大盛況だっただろ、ああいう奇抜なアイデアを活用したい、適材適所といったところか」

「ふーん、そういえば海老名さんってオタクな趣味あるんだっけ？」

「オタク趣味をバカにするなよ？ ああいうのは創作活動においてだな・・・」
と力説しようとする比企谷だったが相模に止められる

「わかったから、力説しなくていいから、ほらその二人も呆れてるじゃん」
シラーとした目で比企谷を見る雪ノ下と由比ヶ浜

「えーあーゴホン、まあつまりオタクだからと言ってバカにするのはやめろと、そういうことだ」

「別にバカにしてるわけじゃ・・・あ！ じゃあさウチが知ってる人呼んでもいい

かな？」

「いいんじゃないね？　ってかオタクの知り合いなんているのか？」

「まあね、んじゃない海老名さんの方は任せるね？」

相模は早速LINEで材木座を呼び出す。

「という訳で目玉競技の提案をお願いしたいんだけど？」

「う・・・メンドクサイ・・・」

まさか本当に参加させるつもりだったとはと哑然とする材木座

「いいじゃん、採用されたらそのまま有志ってことで手伝わってもらってから比企谷とも話す機会出来るよ」

「うーむ、そういうことか・・・最近八幡とまともに話しておらぬしなあ・・・」

「んじゃ決まりだね！でも期限は短いからウチも手伝うから！早速考えよ！」

そう言うのと相模と材木座は図書室へ行くことになった。

「あの、なんか近くないですか？」

相模がやけに近いので挙動不審になる材木座

「そっかなーそれよりほら、早く考えよ？」

と相模は余計にくっついてくる

「う、うむ・・・運動会といえば騎馬戦・・・」

と一緒に考える訳だが上手くまとまらず、家に帰ってからでもLINEでやり取りをする羽目になってしまった。

その後、海老名、材木座による目玉競技のプレゼン会が開始される。

海老名は大将を設定した棒倒し、対して材木座はコスプレをして騎馬戦をする通称チバセン、プレゼンが終了し相模からねぎらいの言葉を受ける

「二人ともありがとう、あとはこの資料を元に検討してみるから」と相模に言われ廊下に出た二人

「えーっとザザ虫くん？ってさきさきや相模さんの仲いいの？」

「え？」

「新館の人気の無いところで一緒にいたの見たよ？」

「ちよっとおぬし！」

「んー実は私もあの辺たまに行くんだけど最近先客が多くてさ？大丈夫、さきさきにセクハラしたのは相模さん以外には言っていないから」

と海老名は言うと手をひらひらさせて海老名は姿を消す

「つく！あのエビが元凶か！余計なことを吹き込みおつて！」

と嘆く材木座であったが今更どうしようもない為諦めてそのまま家に帰るのだった。

帰宅途中に相模からLINEが入る

『案は両方採用するつもりだけどちょっと揉めてる、でもウチ頑張るから！体育祭一緒に頑張ろう！』

「うーむ、自分で言うのもなんだがいろいろめんどうさいしのう」

と材木座は相模に無理せず頑張れと送っておく

『今度は一人で頑張るつもりだから！応援ヨロシク！』

無駄に明るい感じのメッセージである

この日これ以上相模からのLINEはめずらしくこなかった。

「まあ流石にやばくなったら八幡達の所に行くだろう」

と材木座はそのメッセージを軽く捕えていたのだがそれが良くなかった。

次の日

「さがみん顔色悪いよ」

教室で由比ヶ浜が相模に話しかける

「う、うんちょっと委員会で疲れてて・・・」

「無理しないで困ったら相談してね」

「ありがとう、そうさせてもらうね」

ニコツと笑う相模を見て安心したのか由比ヶ浜は自分の席に戻る

しかし由比ヶ浜の後ろ姿を見て相模はつぶやく

「こんなの相談できないよ・・・」

その日の昼、材木座は屋上へ向かっていた。

新館付近は海老名が出没する可能性があるということが分かったためである

閉鎖されてるせいもあって屋上方面には完全に誰も来ない状態になっているからだ。

「屋上に出れずとも階段の踊り場で食すればよいのではな」

とまたも購買で買ったパンとコーヒー牛乳を手には腰を下ろすとすすり泣く声が聞

こえる、そして周りを見渡すとまたも扉付近にだれかが座っているのが見えた、よく見ると相模であつた。

「もしかして友人とトラブルにでも？ いやもしや男に振られたのかなのか？ ここは一時離脱した方が・・・」

と腰を上げるが

「あ・・・」

相模が気づいてこちらと目が合う、さすがにこの状態で無視はできない

「委員長殿どうされた？」

と相模の方へ近づきながら聞くが

「ご、ゴメン・・・ウチの問題だから・・・」

目をそらして俯く相模

「うーむ成程！ 察するに恋愛的な物であるか？ 彼氏がどうこうとか？ そういうことなら全くアドバイス出来ぬな、スマヌ」

と材木座は立ち去ろうとする

「違う！ ウチ彼氏いないし！・・・ってそうじゃなくって！」

突然大きい声で怒鳴られたのでびくつとする材木座

「ヒッ！い、いやスマヌ、てつきりいるのかと……ってそれなら一体？」

「……本当にゴメン……迷惑かけたくないし……」

またも黙り込む相模に材木座はまたも思いついたセリフを言う

「我は無能だが卑怯者ではない」

「は？」

「某吸血鬼漫画に出てくる大英帝国の将軍が最後に言ったセリフよ、我も無能であるが知り合いが困っているのを知って立ち去るのは卑怯者ではないか？もつともこれが八幡だった場合にはその限りではないがな！」

「……比企谷の扱いぞんざいじゃない？」

「ふん、奴がマジ泣きしてるところなんぞ見たくはないわ、泣いたふりして縋り付くことはよくあるがな！」

「それ結構卑怯だと思うけど……本当に君たちは面白いね……」

相模は少し元氣を取り戻したようだ。

「でも……大丈夫、ウチが悪いんだから……」

と言い淀む相模に材木座は一喝

「嫌だ！そんな頼み事は聞けないね！」

それを聞くと相模は目を丸くする

「あ……いや……これもその将軍が最後に言った言葉でな……一度言っただけだ、スマヌ」

と材木座は頭を下げる

「う……ううん……怒ってない、ちょっと驚いただけ……」

その言葉ほっとする材木座

「……おぬし、いつもLINEで我に愚痴を並べ立ててるではないか、この件もどの道後から愚痴を送ってくるのであろう？返信するときの名言を探すのもなかなかめんどくさい、今話していただけると大変助かる」

「理由が君らしいというか……そういうことなら仕方ないね、うん、実はね……」
ようやく重い口を開く相模、その話す内容は委員会のことだった。

プレゼンの後多数決を取ったら同数であり、ならば両方やってみようと提案したところ運動部勢に反発されたという、しかも自分は友達だと思っていた二人の女子

が中心になって反発しているということだった。

「ウチ、友達だと思ってたのに……それに材木座君の事も悪く言われて、つい感情的になっちゃって……」

相模が感情的になって怒鳴ってしまった為、委員会はかなりむちゃくちゃな状態になってしまったとのこと

「ウチじゃやっぱ無理なのかな……結局ウチ誰かに頼らないと何にもできないし……」

落ち込む相模に材木座が一喝する

「よいか相模殿！貴女にいい言葉を教えてやる！人の足を止めるのは絶望ではなく“諦観”、人の足を進めるのは希望ではなく“意志”だと！」

「それもまた漫画の名言ってやつ？で諦観って？」

「左様、また漫画だ、我はこれぐらいしか知らぬからな、んで諦観とは悟って諦めることだそうだ、漫画では“あきらめ”とルビがふってあった」

「そっか……でも諦めず頑張ろうと思っても……遥にもゆっこにも裏切られて……ウチ、力が欲しい……」

「フム・・・今力が欲しいといったな？」

「・・・うん」

「力が欲しいか！ならばくれてやる！しばし待たれよ！」

と材木座は叫ぶと奉仕部へと向かう

「たのもう！」

とノックもせず扉を開ける、中では雪ノ下と由比ヶ浜が一緒に食事をしていた。

「うわっ！びっくりした。中二？どうしたの？」

「ぎ、財津君、ノックをしなさい」

「八幡は何処だあ！！！！！！」

「ひえええ呼ぶ！今呼ぶから」

と驚いた由比ヶ浜は比企谷へ連絡する、しばらくするとだるそうな足取りで比企谷がやってきた。

「なんだ材木座、ラノベの感想は放課後にしてやるから昼に呼び出すなよ、大体昼休みなんだから休ませろ」

といつもの調子の比企谷に食ってかかる材木座

「違うわ！目玉競技の為に我が徹夜して考案したチバセンがぼしやるそうではないか！あのエビが考えた棒倒しも無くなるそうだぞ！貴様一体どういうことだ？」

「え？俺何も聞いてないんだが？」

「ちよつとその話詳しく聞かせてくれないかしら？」

「さがみん大丈夫って言ってたけどやっぱりなんかあったんだ・・・」

「八幡！委員長殿を立候補させておいてフォロー無しとは無責任にもほどがある！」

いつもと違う剣幕に比企谷は哑然として見ているだけだ、それを見かねて雪ノ下が代わりに返答をする

「財津君？それは心外ね、私たちは困った時には相談に来てといったわ、現に目玉競技の提案に・・・」

と雪ノ下が言うが材木座はこれに猛反発

「ちっがーう！その後のフォローだ！相模殿は今、孤軍奮闘孤立無援四面楚歌儕軍孤進状態なのだぞ！！！！」

その返答に雪ノ下は表情を変える

「!!その話詳しく聞かせなさい!あと由比ヶ浜さん?相模さんと城廻先輩を呼んで!今すぐ!」

「・・・相模殿は我が呼んでくる、待たれよ」

そう言うのと材木座は相模の所にダッシュで戻る

「奉仕部の協力を取り付ける!急いで来るのだ!」

「そんな・・・また雪ノ下さん達に頼るなんて・・・ウチが悪いのに・・・」

とうとうむく相模に材木座はまたも一喝

「よいか相模殿!以前ARMSのリーダーに関する名言を教えたはずだ!あの名言は実は一番大事なものを持っていないといけないと締めくくられておる」

「大事なものって?」

「それは“信頼”である!既に相模殿は生徒会長殿や八幡達の信頼を勝ち取っておる!故に奴らをバンバンこき使っても文句は言われん!奴らの力はおぬしの力、おぬしの力はおぬしの力だ!」

「あははは、何言ってるかわかんないよ・・・」

「四の五の言わず来るのだ！」

相模の手を握るとぐっと引つ張る材木座、そのまま奉仕部へ

「連れてきたぞ！」

とまたノックもせずに部室へ入る

「え？中二、なんでさがみんなの手を握ってるの……？」

由比ヶ浜は哑然としている

「え？材木座？マジで？」

比企谷も驚いている

「い、いやこれは……ええい！今はそんなことはどうでも良からう！」

と材木座は相模の手をぱっと離すとそのまま相模を部室の中央へ押し出す。

「我もいた方がよいか？」

相模は首を振る

「大丈夫、ありがとう」

「相模殿、幸運を祈る」

材木座はビシッとサムズアップするとそのままコートを翻し立ち去るのだった。

第八話

その後の体育祭実行委員会は奉仕部の介入により強引ながらも反対派の運動部勢を抑えることに成功する。

そして当初の計画通り材木座も有志という形で実行委員会に参加することとなった。

奉仕部も委員会の手伝いで右往左往することとなる。

そして今材木座と比企谷は入場門の製作にとりかかっている所だ。

ようやく話す機会が出来たと材木座は早速川崎の件について聞いてみることにした。

「なあ八幡よ、最近ゆっくり話す機会が無くて我は寂しかったぞ？」

「俺は寂しくない、むしろ今うざったくて仕方ないまである

釘打ちしくじったらお前のせいだからな？」

ベニヤと角材を釘で打ち付ける比企谷、材木座は抑える係だ

「なあ、なんか逆じゃないか？お前が打って俺が抑えたほうが良くね？」

「私の指は文学を紡ぐもので力仕事の為ではないのだよ」

「文学……？ちょっと何を言っているのかわかりませんね。だいたいどう見てもお前はグリズリーにしか見えん、今なんて俺がグリズリーを調教しているように見られるまでである、だからお前が釘打ちしろ、意外と力いるんだぞこれ」

「そう言うなよはちえもーん、作業しながらボーイズトークでもしようぜ？貴殿気になってる女子いたりするう？」

「……なんだおまえ？なんか悪いもんでも食ったか？」

こんな話材木座は全くしないので怪訝な顔になる比企谷

「いや、我とて男だからのう……。ほれ、以前おぬしの依頼の件で関わった川崎殿なんてちょっと怖いけど美人だしスタイルはいいし何かエロイし……。よくね？なんかよくね？」

「川……。崎……。？」

と首をひねる比企谷にこいつ以前色々やった上に冗談とはいえ愛してるまで言っ
といて名前も覚えてないのかと呆れる材木座

「ほら！貴殿がスカラシップ教えて解決したっていう、川崎殿の弟君が依頼して

来たっていう・・・」

と説明するが

「思い出した！川崎大志の野郎！あいつ小町にちょっといかけてないだろうな？
思い出しただけでもイライラして来た、ちょっと小町に確認するから待ってろ」

と全く違うことを思い出す比企谷である。

「いやそうじゃなくてだな・・・こりゃ駄目だな・・・」

目の前で必死に妹にLINEを送る比企谷を見て呆れる材木座だった。

しばらくすると相模からLINEが入ってくる

『そっちはどう？』

材木座は全く脈なしな旨を伝えると

『そっか、んじゃ川崎さんにはウチからうまく伝えておくよ』

と返信が来る。

「あれ？いつの間にそんな仲に？」

疑問に思ったので聞いてみると

『え？だってほっとくと川崎さんにセクハラするんでしょ？だめだよ？』

「んもう、だからあれは・・・」

となんと返信しようか考えてると

『冗談、ウチも材木座君に協力してるって話しといたから』
と送って来た。

更に

『まあ女子のことは女子に任せて！』

とのこと

「確かにこんなどんな面して言ったらいいかわからん、女子に任せた方が得策であるな」

と思ひ任せる旨を返信する、しばらくして相模が走ってきた。

「ちょっと材木座君借りるね！」

と相模は比企谷に言う、と材木座を廊下の陰まで引っ張っていく

「大変！川崎さん自分で確かめるって！比企谷に告白するって！」

「ええー明らかに悪い未来しか見えんのだが・・・」

「どうしよう・・・」

と相模と材木座が頭を抱えてると

「なんだお前ら、こんなところに隠れて何やってんだ？」

比企谷が探しに来た。

「あ、ちょっと目玉競技のことについて材木座君とね？」

と相模はごまかそうとすると

「なんだ知ってたのか、実は雪ノ下からチバセンに使う衣装の製作をどうしようかって連絡が来てな、その件だろ？」

どうやら勘違いしてくれたらしい

「それでだな、文化祭の時衣装づくりしてくれたあいつ、ほら、川なんとかって奴いただろ、あいつに頼もうと思うんだがどうだ？」

それを聞くとポンと手を打つ相模

「・・・そっか、そうだね、川崎さんが適任かもね」

「え？相模殿？」

「でも悪いけどウチ忙しいから比企谷が頼んでくれない？」

「あ？ああ、別にいいけどよ・・・由比ヶ浜のほうがいいんじゃないか？」

「ダメ、比企谷が言い出しっぺなんだから比企谷でお願い」

相模の圧力にしぶしぶ承諾すると入場門の製作に戻る比企谷

「相模殿？どうされるおつもりで？」

「明日、比企谷が川崎さんをお願いするタイミングで告白させる」

「ちょっと性急すぎであろう？・こういうのはこう、フラグ管理をしつかりとしてだな？そもそも心の準備とか・・・」

「フラグがなにかは知らないけど、こういうのってズルズルいやってもいいことないよ」

早速川崎に連絡する相模、電話口で揉めていたが説得に成功した模様、それを聞き不安に駆られながらも次の日を迎える材木座であった。

次の日の放課後、川崎を新館近くに待機させ比企谷に川崎はその辺にいるらしいとの情報を流し二人つきりにさせることにした。

それを離れたところから木に隠れつつ観察する材木座と相模

「なあ、我いる必要あるの？」

「し！元々材木座君が請け負ったんでしょ？最後まで見届けないと」

比企谷は手を合わせて委員会への協力をお願いしているようだ。

川崎は何か言った後うなずいている

「フム、委員会への協力は取り付けたようだが、ここからか」

川崎は帰ろうとする比企谷を呼び止めている、そこから何か話しているようだがしばらくすると比企谷が頭を下げ川崎が俯きがちに離れていく。

「ウチちよっと行ってくる」

ぱっと駆け出す相模

「あ、置いていかないで・・・」

と材木座も立ち上がったが

「お前ら何やってんの？」

比企谷に見つかってしまった。

「のぞき見とは悪趣味だな」

一人残された材木座は比企谷から睨まれる

「ち、違うのだ・・・」

慌てる材木座

「そーいや昨日あいつのことをどう思ってるとか聞いてたよなおまえ？」

睨みながら比企谷が近づいてくる、材木座はこれまでだと思い本当のことを話すことにした。

「おまえ・・・余計な事を・・・おかげであいつに嫌な気持ちにさせちゃったじゃねえか」

説明を聞いて頭を抱える比企谷

「罪悪感を抱くぐらいなら付き合ってしまったえばよかったであろう」

「・・・出来るわけねえだろ・・・」

「八幡よ、良い言葉を教えてやろう『人生には必ず一度は“明日”を迎えるために踏み止まらなければならない“昨日”がある』だ、川崎殿は明日を迎える為玉砕覚悟で告白をしたのだ」

「・・・」

「我のような者に相談するほどあの女子は悩んでおったのだ、気持ちを汲んでやってくれぬか」

「俺にどうしろと・・・」

「これまでと同様、普通に接してくれればよいのでは？ 委員会の手伝いもしてくれるのであろう？ 何かあれば相模殿がフォローする」

「相模って・・・ってそういうやさっき相模もいたな、あいつも絡んでいたのかよ」
「左様、その辺はあまり突っ込むな、さて仕事の時間であるな！ 我は早速川崎殿と衣装の打ち合わせをしてくる故、入場門は貴様一人でやるのだな！ 納期は待ってくれぬぞ！」

そう言々とダッシュでその場を離れる材木座

「あ！ 汚ねえぞ！」

それを追いかける比企谷

「まずは一件落着？ か？」

と走りながら思う材木座、そしてそのまま衣装の製作と打ち合わせの為に借りた空き教室に来るとそこには抱き合う相模と川崎がいた。

二人とも立ったまま無言で抱き合っている。

これがリアル百合か、美女が抱き合ってる姿は絵になるなとか三次元も中々尊いものだとぼーっと見ていると、川崎のすすり泣く声が聞こえる、振られた川崎を相

模が慰めているように見えた。

相模がこちらをチラッとみると目で部屋を出るよう指図してくる

「ちょっと右腕がうずくので・・・」

と空気を読んで廊下に逃げ出す材木座。

「フヒー、これでは仕事どころでは無いのう」

しばらく待っていると相模が呼びに来たので衣装の打ち合わせを開始する。

そこにはいつも通りの川崎がいた。

「フム、川崎殿は明日を迎えたようだのう」

と材木座は満足そうにうなずくのだった。

それを見て相模と川崎はこいつ何言ってるんだといった顔をしていたが、その辺

は全く気にせず打ち合わせを進める材木座であった。

第九話

話の流れは原作通りですが材木座の回りだけが変わっています。

迎える体育祭、目玉競技もどうにか上手いき比企谷の大活躍？もあって体育祭は無事？終了する。

勝敗は白組の勝利、最終的に棒倒しは赤組が勝ったのだが両軍共に反則行為者続出したとのことで勝負はノーゲームになったからだ。

「んもう！八幡のせいで！反則負けとは！」

「いや材木座君も関わってたでしょ・・・あんなバレバレなことやってて気が付かないと思っているあたり比企谷らしいね」

「ごまかせたと思ったのに・・・」

「無理無理、それよりあの演説はなに？呆れるを通り越して恥ずかしかったんだけど・・・」

相模が言うのは棒倒し前の材木座の演説、リア充に対する恨みと憎しみをぶつけた演説の事である

「別におぬしが恥ずかしがる必要は無かろう？それとも『諸君！私は運動会が好きだ！この地上で行われるありとあらゆる運動会が大好きだ！』というどっかの少佐みたいな演説にすれば良かったか？」

「少佐がなにかしらないけどあれはちよつと卑屈すぎるというか・・・言ってる恥ずかしくないかなと心配になっちゃって」

苦笑いする相模

「リア充死すべし！おかげで赤組に士気は天元突破しておっただろう・・・でも言われてみるとおぬしの言うように今更恥ずかしくなってきたんだが・・・我どうしたらいいと思う？なんか隠れるところない？」

急に体を縮こませる材木座に相模はため息を付く

「後悔するなら言わなきゃいいのに・・・」

「だって八幡が・・・それにその場のノリとかそういうのとか・・・」

と相模の横でどんな体が小さくなる材木座に相模が一喝

「んもう！ほらもつとしゃきつとして！棒倒しの時見てたけど敵に一人で突っ込んでいく材木座君はかつこよかったよ？」

と材木座の背中をたたく

「ほんとに？」

「本当！それに運動部が数人がかりで来てたのに全員押し返してたじゃん！おぬしただのデブじゃないな？」

ちよつとおどけて材木座の腹をつつく相模

「グッフッフ、何しろ我は選ばれし者！剣豪將軍の生まれ変わりだからのう！もつとほめても良いのだぞ？」

おだてられていい気になり腕組みをして高笑いをする材木座

「そうそう！それでこそ材木座君！」

そして相模はぼそつと最後に付け加える

「・・・・そうやっていつも堂々と胸張ってればかつこいいのに・・・・」

「あ？小さくて聞き取れなかったが何か言ったかおぬし？」

と聞き返す材木座だったが相模は返答代わりに腹をビシッと人差し指でつつく

「んもう秘孔でも突くつもりか？・・・それより棒倒しは反則した者が多数いるとか言っておったがそんなにいたかのう？我が見た限りでは見受けられなかったのだが？」

「・・・いたよ沢山、ウチがいうんだから間違いない、材木座君も友達が悪く言われるのは嫌でしょ？」

「もしやおぬし・・・職権乱用では？あと腹に指をめり込ませるな、ちよつと痛い」
つづくのに飽きたのか相模は材木座の太った腹に指をめり込ませる

「下らないことを気にしてる罰だよ、それにしてもすごいね

どんどん指が入っていく」

「ちよつと痛い、そしてくすぐったい！あふうん・・・」

「ごめごめん、冗談だって」

「お嫁に行けなくなったらどうしてくれるのだ」

呆れる材木座とそれを見てアハハと笑う相模であった。

「それより体育祭終わったら、この間階段から落ちた時に助けてくれたお礼をさせてよ」

「今更であろう、それにお礼と言われても・・・飯をおごってくれるとか？」

「別にいいじゃん、ウチがしたいんだし？材木座君がいいと思うことなら何でもいいよ？」

ニコツと笑う相模に材木座はたじたじとなる、そもそも材木座は背が高いため、必然的に相模は上目遣いになるのだ、照れ臭いのか少し顔を赤らめてる相模をみて三次元も悪くないとちょっと思ってしまう。

「それ、あたしも混ぜてもらっていい？」

後ろから唐突に話しかけられビクツとする二人

「うわっびっくりした・・・って川崎さん？」

後ろには川崎が立っていた。

「あんたらがいちゃいちゃしてたから話しかけにくかったんだよ」

「いちゃいちゃって・・・」

と顔を真っ赤にする相模をほっといて腕組みをして材木座に向き直る川崎

「けじめつけさせてもらったお礼させてよ」

と晴れやかな笑顔を浮かべる川崎、因みにチバセンの際は何かかたき討ちかの

ように雪ノ下と由比ヶ浜を執拗に追いまわしていたのであった

「・・・こっちもお礼か、我は特に何もしていないのだが」

「あんたが比企谷に聞いてくれなかったらあたしも告白なんて出来なかった。そのままズルズル思いを引きずっていたと思うよ？だからお礼させてよ」

「ウームちよっと考えさせてくれぬか」

腕組みをして考える材木座の後ろでは相模と川崎が笑顔で並んでついていくのだった。

夕食時のこと、うーんとうなっている材木座に母親が話しかける

「義輝？どうしたの？悩み事？」

「うむ、実は色々あって知り合った人がだな、恩義を感じているとかでお礼をしてくれるそうなのだ、なんでもいいと言っているのだが何にしたらよいかと、同学年だしあまり高価なものを要求しても・・・」

「え？知り合って友達？男？女？」

「二人いるのだが両方とも女子だな、片方とはLINEで每晚やり取りしてるが知

り合い以上友達・・・」

と説明している最中に母親が騒ぎだす

「ちょっとあなた！義輝に女の子が！しかも二人って！」

「おい！義輝！その話本当か!?それは現実の女なんだろうな？」

「失敬な、別なクラスではあるが両方とも現実におるわい、片方はちょっとガラ悪くてもう片方は委員長をやっている・・・」

「マジか！ヤンキーと委員長なんてなんという王道！とうとうお前にも春が・・・」

「あらー何か菓子折りもって挨拶にいかないといけないかしら？」

まるで話を聞かない両親である

「ちょっと二人とも大げさすぎる！大体そういう関係ではないと言っている、ちょっとアドバイスしただけで大したことはしておらんし」

「うーむ、でもお前のアドバイスでその二人は恩義を感じるまでになったんだろ？おまえ相当凄いな、流石俺の息子だ。しかし確かに悩むよな・・・うん、そういえば今日客からこんなものを貰った、これを有効に活用するとよい」

と池袋のとある施設の無料チケットを押し付けてくる

「3枚ある、本来は家族で行く予定だったんだが仕方ない、お前に譲ろう」

しかし材木座は押し付けられたチケットを見てちょっと困った顔

「いやこれ女子にとってどうなん？」

「母さんも好きだから大丈夫だろ」

「確かにそうだけど・・・いやそうではなくて一緒に出かけるとかじゃなくてお礼をしたと言っておるのだが・・・」

「お礼？んなのついでに一緒に食事にでもいけばいいだろう、池袋なんて食うとこ沢山あるだろ？」

何故かその辺は適当である。

「ほら・・・焼肉食い放題のあそことか！」

と適当な事をいい始める、さすが自分の父親だと呆れる材木座

「いくらなんでも女子を焼肉食い放題に連れて行くのはNGというのは我にも分るわい、他にと言われても池袋なんてラーメン屋ぐらいしか知らんのだが」

「あら？最近ラーメン女子とかで女の子でもラーメン屋に行ったりするみたいよ？ドラマにもなっていたし、それにこの間義輝の学校の女の先生がラーメン屋に

入っていくのを見たわ」

「もしや長髪なの？」

「ええ、お一人だったけどさすがにあの年齢になると彼氏といくのは恥ずかしいのかしら・・・全然そんなことないのにねえ」

と何も知らない材木座の母親は残念そうに言うが

「彼氏・・・いたらよかったのに・・・」

真実を知っている材木座はもっと残念そうな表情になるのであった。

第十話

次の日の放課後、新館近くに相模と川崎に呼び出される材木座

「どうするか決めた？ ウチたちは材木座君の判断に任せるよ？」

人気の無い場所であり、立ち位置も材木座の向かいに少し離れて相模と川崎が並んで立っているのだ。

知らない人から見たらどっちに告白するとか彼女にするとかそういうように見えるレベルである。

「何を？」

「お礼の話なんだけど？」

「う、うむそれか・・・実は池袋に美味しいラーメン屋があつてだな、そこでラーメンをおごってもらうかと」

その答えにちよつと残念そうな表情をする相模だったが

「そっか、ウチはいいよ？ 川崎さんはどう？」

と隣にいた川崎も誘う

「あんた達がそれでいいならいいよ」

川崎もそれならと頷く

「左様か、後だな、親父殿からとある施設の無料チケットを三枚もらってだな、池袋を選んだのもそれが理由で・・・そのだな？我も私の家族も結構好きなのこなので変なところではない、嫌ならかまわんがせっかくなので一緒にいかがか？」

その言葉に目を輝かせる相模

「もしかしてサンシャイン水族館？ナンジャタウンとか？」

「いやその手のハイカラなものではない、当日のお楽しみということで、あと朝食は抜いておいていただけると助かる、何しろそのラーメン屋は人気店なのでな」

数日後、修学旅行も目前に控えた週末、ようやく三人の予定がついた三人は池袋駅に降り立つ。

材木座は駅から出るとそのままラーメン屋へと向かった。

「え？もういくの？」

「うむ、人気がありまするので早くいかんと並ばないといけなくてのう」

東口から出ると南の方へ歩き、程なくして目当ての店にたどり着く

「無敵家・・・このラーメン屋？って材木座君が好きそうな名前だね」

「ウム！無敵にチートは我の夢！異世界に行きたい！」

「あんたは相変わらずだね」

ため息をつく川崎

「よいではないか、それに予想通りこれは好機！まだ人はほとんど来ておらぬ！いざゆかん！」

無敵家は開店直後の為か人は並んでおらず、すぐに店内に入れる状態のようだった。

店に入り注文をする、出てきたラーメンを食べた二人は

「うわ！凄！」

「ちよっと味が濃すぎない？」

食感と味に驚く二人

「ほむん、これが良いのよ！」

と言いながらズズとラーメンをすすする材木座

「材木座君ってラーメン似合うね・・・」

隣に座った相模は材木座の喰いっぷりに半ば呆れ気味である

「ちよつと食べきれないからウチの分食べてよ」

と相模は店員から小鉢をもらうとそこへ食べかけの麺や具を入れて材木座へ渡す

「へ？でもこれ・・・」

さすがに躊躇する材木座、これでは間接キスのようなものである

「あんた体でかい癖に細かいこと気にしすぎ、あたしだって弟に食べてもらうことあるよ？」

その様子を川崎はニヤニヤしながら眺めている

「そうそう、気にしすぎだって！」

「い、いや・・・まあそっちがいいと言うなら・・・」

渋々小鉢に口をつけて中身を一気に飲むように食べる

「どう？おいしい？って早！」

「味は変わらんであろう、それにラーメンは飲み物！喉で味わうのよ！」

「あーもっと味わって食べてほしかったかなーでも材木座君が満足したならいいか」
と相模は若干残念そうである

「あんた落ち着いて食わないとそのうち死ぬよ？」

と川崎は呆れた表情である

約束通りおごってもらう材木座

「うむ、人の金で食う飯は美味しいな！」

「結構な値段だよ・・・」

材木座はラーメン以外に丼物や餃子まで頼んでいたためかなりの金額だ
相模と川崎で折半したがそれでも痛い出費

「あんた食いすぎだよ、本当にそのうち死ぬよ？」

と川崎は呆れた表情

「美味しいもん食って死ぬなら本望であろう！」

「ちょっとこれは考えないとね・・・」

「そうだね・・・」

満足げに宣言している材木座を見て二人は心配そうになりながらつぶやくのだった。

そんな二人を今度は西口に連れて行く

「ここが親父殿から授かりし無料チケットの場所！」

「なにこれ？」

「・・・？」

相模も川崎も哑然としている、看板には『池袋演芸場』と書いてある

「うむ、池袋演芸場であるな」

「・・・あたし、こんなところ初めて来たんだけど」

「ウチも、友達の話で遊びに行ったりデートした話聞いてもこんなところに行ったとか聞いたことなんだけど？これなんなの？」

「落語とか漫才とかが見れるのだ、我の両親も大好きなのだが・・・やっぱ嫌であるか？」

と予想以上にドン引きしている二人に焦る材木座

「う、うんまあ材木座君のご両親も好きならウチはまあいいかな？」

「そ、そうだね、何事も経験っていうし、意外と面白いのかも」

「よかった・・・」

と恐る恐る中に入る二人を見てホッとする材木座であった。

「なんか映画館みたいだね」

「日曜なのに人がほとんどいないんだけど・・・」

「それも演芸場の醍醐味よ、さあさあ座って」

しばらくすると演目が始まる

「あ！あれテレビに出てくる芸人じゃない？」

「ほんとだ・・・」

「興奮するのは分かるのだがもうちょっと静かにだな・・・」

二人ともワイワイ騒ぐのでひな壇の芸人から客いじりが飛んでくる

「ほら！その色男！美人を侍らしちゃって！うらやましいねえ」

「え？我？」

「そうそうあなただよ」

自分がいじられるとは思ってなかった材木座はあわあわとする

「ウチら美人だって、川崎さん」

と照れる相模

「・・・」

赤くなり無言で俯く川崎である。

その後も演目は続くが、予想以上に面白いのか相模も川崎も肩をふるわせて笑いをこらえている

そしてたまに材木座に飛んでくる客いじりである。

客が少ない為3人並んでいるはとても目立つのだ。

出てくる芸人は毎度材木座をからかうのでその度に慌てる材木座と笑いをこらえるので大変な相模と川崎であった。

数時間が立ちそこその時間になったので出ることにした。

「えーまだ見たいんだけど」

「これ面白い、今度大志や京華も連れてこようかな？」

二人とも大満足である

その後西武池袋の屋上へと二人を連れてくる

「へーこんなところあったんだ・・・」

「京華連れてきたら喜びそう・・・」

「知っておるか？ここは池袋の東側にあるが西武デパート、西にあるのが東武デ

パートとなっておる、ビッグカメラに入ると延々とCMソングが流れておるのだ『不思議な不思議な池袋／＼東は西武で西東武／＼』ってな」

「へー詳しいね」

「ウム、ここ池袋は我にとって特別に思い出があるところだな、幼少の時、両親と駅前のビックカメラは元より先ほどの演芸場に行ったり、サンシャイン60に行ったりな・・・あっち方面には親父殿ご用達のレコードショップがあるのだ・・・我にとっては特別な思い出がある場所よ・・・」

「・・・材木座君にもやっぱ特別な場所ってあるんだ・・・」

「酷いのう、普通あるのでは？川崎殿もあるのでは？」

「そうだね、京華とよく出かける公園とかは特別な場所かな？あと家族で行くところとか・・・」

と川崎は家族がらみで色々あるようだった、しかし

「・・・ウチはないかな・・・」

と悲しそうな顔になる相模

「ま、まあ相模殿は我と違ってリア充だし？作ればよいではないか！大丈夫！多

分できる！我が保証する！というわけでその売店で何か買つて来るがお主等はどうか？」

「特別な場所・・・そうだね、できるといいな、あとウチはもういらなから」「あのラーメンだけでおなか一杯、あんた食いすぎだって」

と呆れ半分で椅子に座る二人

そこに聞き覚えのある声がある

「あれー？相模さん？さきさき？あとぎ、ザザ虫くん？だっけ」

振り返ると大量の紙袋を抱えた海老名が立っていた。

演芸場って男女誰を連れて行っても受けはいいです。

常に人が少ないのですがこんな客いじりはめったにないのでお勧めです。

第十一話

「三人で何やってるの？」

「あ、いや、これは・・・」

回答につまりあたふたとする材木座の代わりに相模が答える

「材木座君には色々手伝わってもらったからお礼としてご飯をおごってあげたの、その帰りなんだ、海老名さんはどうしたの？」

「私はお気に入りのお店でお宝を発掘してたんだ、その帰りにちょっと寄ってみたんだけどねー」

とニコニコしながら紙袋を見せる海老名だが、材木座は気が付いた。

ここ池袋は目の前の女子向けの店が沢山あるということに、そして当然その紙袋の中身はとんでもない代物が盛りだくさんということに

「え？お宝！みせてみせて！」

と紙袋の中身を見ようとする相模を材木座は抑える

「ダメダメ！相模殿！その袋はパンドラの箱である！見たら希望も残らぬ！」

「そいつの言うとおりだよ、見ない方がいい、大体予想が付く」

と川崎も海老名の趣味を理解している為、相模を止めるがそれを見て残念そうな海老名

「えーみんなで一緒に腐ろうよ？」

「御免被るわ！・・・だから相模殿もこっそり手を伸ばさない！」

と材木座は紙袋の中身をこっそり見ようとしたのを止められてふくれっ面になってブーブー言っている相模を抑える

「ふーん、二人ともやけに仲いいね、そっか材木座君は相模さんを選んだんだ・・・」

「「は？」」

全員こいつ何言ってるの状态である。

「え？違うの？だって新館のところでどっち選ぶみたいな雰囲気になってたでしょ？」

「あんた見てたの・・・それ誤解、こいつに色々世話になったからってどんなお礼してほしいか聞いてただけだよ」

と川崎が説明する

「なんだ、そっかーそうだよね、グループ内で恋愛はご法度だよね、変な雰囲気になっちゃうしね・・・」

ちよっと暗い表情になって俯く海老名

「ちよっと海老名さん？どうしたの？」

と相模が言うが

「うーん私の問題だし・・・」

と海老名は口ごもる

「あんたにも文化祭や体育祭で世話になったしちようどお礼がしたかった所、何かの役に立つかもしれないから話しな」

と川崎は海老名を見る

「い、いや、やっぱいいや！んじゃあねー」

とその場を立ち去ろうとする海老名に川崎がさらに食いつく

「海老名！修学旅行の班がなんか不自然に別れてるよね！どうせその件じゃないの？あたしもそれに巻き込まれてんだけど？いいから話してよ！」

海老名は一喝されると足を止め、恐る恐るこちらを振り向く

「う・・・そうだね・・・実は隼人君にも相談してるんだけど・・・」

と海老名は戸部が修学旅行中に自分に告白しようとしていることを伝える。

自分は付き合うつもりは無いけど、はっきりと告白を断ってしまうとグループの仲が今までと変わってしまうかもしれない、それは嫌なので告白自体を無かったことにするか諦めさせることはできないかと葉山に相談したりしているけど上手いくか不安だとのこと。

「はーリア充は大変だのう・・・」

材木座は例によって他人事である。

「あたし、海老名の事見損なったよ」

海老名から話を聞いた川崎が声を荒げる

「あたしは比企谷に振られると分って告白して踏ん切りをつけた」

え？と海老名は驚いている

「もし逆だったとしてもあたしはあんたみたいになうやむやにしようとは思わない、自分ではじめはつけるよ、それに葉山？って戸部？って奴と傍から見ても仲いいし、男の肩持つに決まってるじゃん」

「そ、そんなことは無いと思う、きつと葉山君も……」

と海老名は反論しようとするがそれを制し川崎は話を続ける

「その諦めさせるってのが葉山って奴がうまくやってあんたへの告白をあきらめさせるか無かったことにした場合、戸部って奴にばれたら二人の仲が悪くなると思うんだけどそれでもいいんだ？」

「そんなつもりは……」

そこまで考えていなかったのか海老名は俯いてしまう。

「んじゃ修学旅行前にはっきりさせな、あたしも立ち会ってあげる」

「う……うん、でもそれだとうちのグループが……それにさきさきがそこまでしなくても……」

海老名はうなづくことは出来ない、それを見て川崎はさらにきつい口調で言う
「それこそあんたところの葉山って奴と三浦に仲を取り持ってもらえばいいでしょ？あの連中ってそんなこともできないの？」

「そんなにうまくいくかな……？」

「あたしはこの二人のおかげで比企谷とうまくやれてるけど？」

と川崎は材木座と相模の方を見る。

「まーね、ウチ川崎さんの為に頑張ったし？友達だし？」

とドヤ顔の相模だがうろたえる材木座

「え？我？なんかしたっけ？」

相模はそんな材木座の耳元に口を寄せてこっそりとささやくように言う

「こういう時は自分もやったと言えばいいの！川崎さんの顔も立ててあげて！」

あまりにも近いので少し赤くなり焦る材木座

「う、うむ！無論だ！この女子は我に『力が欲しい』と願ったのでな！くれてやったまですよ！我が名はジャバウォック!!世界のすべてを破壊せん!!」

相模が近すぎるので照れて若干錯乱気味になる材木座

「世界壊してどうするのよ！」

そこに相模がすかさず突っ込みを入れる、そんな二人を若干呆れるように見る川

崎

「・・・まあこんな変な奴らだけどき、あたしは助けられたんだ、あたしはあんたの事も友達だと思ってる、友達の事考えてなにか問題でも？」

そこまで言われると海老名は黙るしかなかった。

第十二話

翌週の昼休み、またも新館近くの人気の無い場所にて

「相模殿、なんで我らまで」

「川崎さんは友達でしょ？あそこまで聞いたら見届けないと！」

と相模に言われ、またもや木陰に隠れて事態を見守る羽目になる材木座

「ほら来たよ」

材木座達が隠れているところから少し離れた方へ葉山、戸部、海老名、川崎がやってくる

戸部と海老名が向かい合って立ち、川崎と葉山は少し離れる。

「そ、それで、海老名さん、話って？あと隼人君と川崎さん？もなんで？」

戸部は若干うろたえて自分が置かれている状況を葉山に聞いているようだ

「俺達は立ち合い、戸部、覚悟を決めろ」

葉山はそういうと腕組みして黙り込む

「へ？」

頭に疑問符を浮かべる戸部に海老名が話し始めた。

「はじまった」

相模がそう言うのと材木座も黙って事態を見守る。

海老名が戸部に近づき何か話をしている、最後に頭を下げ川崎とその場から立ち去った。

「うぁーないわー、これないわー、ヒキタニくんにも相談に行ったのに、俺アホみたい・・・」

泣いているのか叫んでいるのか分らない声を出す戸部

「踏ん切り付いたか？今日は部活休んでいいから帰っていいぞ」

「いや出るっしょ！大体友達でいようって言うてくれたから嫌われてる訳じゃないし！それに『今は』って言うてたっしょ？焦らず時間をかけることにするって！だからこの気持ちボールにぶつけるっしょ！」

「そうか、んじゃ今日はお前だけ特別メニューだな！」

「やるっしょ！いやーマジ隼人君惚れるわー俺隼人君にマジ惚れだわー」

「・・・戸部、振られたからと言ってそれはどうなんだ？俺にそういう趣味はな

い、やっぱおまえ帰れ」

「ちよつちよつと！隼人君！冗談だつてばー、え？なんでマジで逃げてんの？ちよつと冗談だつてー」

騒がしくその場から走り去る二人。

「八幡達にも相談してたのか？奴に彼女なんていたことないのに飛んだ無茶ぶりだな」

「・・・」

「どうされた？相模殿？」

相模は材木座をじーっと見つめている

「おーい？」

と材木座は相模の目の前で手を振るとそれにハッと気が付き

「ご、ごめん、あ、あのさ、明日もここでお昼食べるよね？」

「うむ、教室には私の居場所はないのでな」

「んじゃ明日何も買わないでここで待っててね！」

相模はそう言うと言と教室に戻っていった。

その日の放課後、材木座は原稿片手に奉仕部へと向かう

「たのもう八幡！久々にプロットを考えたぞ！」

「お断りだ、本を読むのに忙しい、そしてどこからかパクったプロットを持ち込むな、完成したのを持ってこい」

「あら？さきほど依頼が取り消しになったから暇になったのではなくて？」

「ヒッキー、中二の相手してあげてよ、かわいそうだよ」

と二人に言われてやれやれと諦め顔の比企谷

「クソっ！仕方ねえ相手してやるから原稿用紙をよこせ、最近運動不足だからな、一度に何枚破れるか試させてもらう」

「酷いよ八幡！お主の力自慢の為に我の原稿を使わないで！って依頼取り消しかどうされたのだ？貴様またなにかやらかしたのか？」

「ちがうわ！さっき戸部と海老名さんが来てだな……ってこれ以上は守秘義務って奴で言えんな」

「そうね、せっかく色々買ったのに無駄になってしまったわ……」

と雪ノ下がテーブルに積み上げられた京都関連の旅行雑誌を見る

「いいじゃん！三日目一緒に回るところ考えようよ！ほら！ヒッキーも！ここなんてどうかな！」

と由比ヶ浜が雑誌を広げて雪ノ下と見ている

「仲良きことは美しきかなという奴かのう……まさかもしや八幡は三日目かの者たちと回るのか？」

「あ？ああ、流れでな？」

「そんな……てつきり我と回るのかと……この裏切り者ー！」

と叫ぶと材木座は走り去るのだった。

次の日の昼休みまたも新館の所へやってくる材木座、すでにそこには相模と川崎がいた

「言われた通り何も買わずに来たのだが……もしや！我的昼飯代をカツアゲしよう！」

「んなわけないでしょ、ほらそこに座って」

呆れる相模と川崎、材木座が座ると両脇に相模と川崎が座る

「材木座君の食生活が大変な事になっているのが分ったのでウチらでお弁当を作っ

てきました」

と二人は材木座へ弁当を見せる

「え？マジで？」

「あんただけじゃないから、みんなで食べるの」

と川崎は大きめのタッパーを開く

「ウチも頑張ったんだからほら食べてよ！」

と相模が箸でおかずを突き出してくるのでちょっと焦る材木座

「い、いや・・・自分で食べるので」

「いいから、こういう時は食べてあげるのが男ってもんだよ？」

「え？そうなの？って無理やり突っ込むな！・・・ムグー」

そこそこ大きい唐揚げを口に押し込まれ目を白黒させる

「残さず食べてね？」

「残したら承知しないよ」

という相模と川崎、もぐもぐと咀嚼をしながらふと材木座は思う

「あれ？なんかおかしくね？なんか我リア充じゃね？」

と疑問符を浮かべるのだった。

その日の放課後

「しつれーしまーす」

「ちよつと失礼するよ」

「あれ？さがみんとさきさき？どつたの？」

相模と川崎が奉仕部にやってきた。

「修学旅行の時に告白の手伝いしようとしてたつてちよつと耳にしたんだけど」
と川崎

「あ・・・ああそういうえばそうだったな、もう無意味になっちゃったが」
振った件もあってこの手の話題になると比企谷は若干答えにくそうだ。

「あつそ、ほら！相模！」

そんな比企谷の態度はどこ吹く風で川崎は相模を急き立てる。

「本当にお願ひするの・・・？」

とても言いにくそうにもじもじしている相模に耳元で川崎がささやく

「ちようにいいから利用させてもらおうって言ったのはあんたでしょ！ほら！あんたの口から言えって！」

「なんか物騒な単語が漏れ聞こえているんですが・・・」

かなり不安そうな比企谷だったが相模は意を決したらしく前に出て頭を大きく下げ

「お願い！ウチにとって特別な思い出がある場所を作りたいの、協力して！」

「「はあ？」」

奉仕部に新たな依頼が持ち込まれる、そしてそれは戸部の依頼と似て非なる依頼、自分にとって特別な思い出の場所を作りたいから修学旅行の時に告白する場所を選ぶ手伝いをしてほしいということだった。

それならとうなずく奉仕部の面々だったが、相模が告白する相手を聞いた時、皆の顔色が変わりまず考え直すようにと説得を始める始末であったという。

これで終わりです。

プロジェクト材木座w i t h相模

著者 もよぶ

発行日 2020 年 5 月 11 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/222455/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
